国際結婚夫婦の価値観等の相互理解と共生

伊 藤 孝 恵

要　旨

本稿では、国際結婚夫婦の価値観等の認識と理解について、日本人同士で結婚している夫婦との比較を通じて、その特徴を明らかにした。その結果、国際結婚夫婦は、全体的に、日本人同士結婚者よりも互いの価値観等は似ていないとしながらも、自分は相手を理解しようと努力しており、相違による摩擦で傷つくことは少ないと認識していることが分かった。その一方で、互いの相違をどう受け止めていくかが価値観等の共生において重要であることも明らかになった。

キーワード：国際結婚、理解、共生

1．はじめに

これまで夫婦間コミュニケーションの重要性や夫と妻のコミュニケーションスタイルや期待の違いは、欧米と比べて少ないものの、ジェンダー研究において徐々に指摘されてきた。しかし、日本における国際結婚夫婦を対象とした研究は、今日に至っても依然極めて少ない。また、国際結婚問題を扱った先行研究においても、夫婦間の言葉や文化、価値観の理解と尊重の必要性を挙げるものが多々あるものの、その指摘にとどまり、これらに焦点をあて、量的に全体像を把握したり事例として深く掘り下げた研究はほとんど見られない。

そこで本稿では、近年増加傾向にある日本人と結婚し日本に定住する外国人と日本人の夫婦間コミュニケーションに焦点を当て、互いの価値観等の理解に対する当事者の認識を探り、相違を乗り越え共生していくための一つの示唆を得ることを目的とする。

2．研究背景

2.1 日本における国際結婚増加の傾向と特徴

日本において「国際化」が声高に叫ばれて久しいが、従来言うところの「国際化」とは、日本人が主に英語を習得したり、アメリカなどに留学したり、欧米の事情に精通したりすることを目指すなど、日本人が国外−特に欧米に目を向け、言葉や知識を吸収していく傾向を指すことが多かった。しかし日本の経済成長に伴い、近年では世界各国からビジネス等の商用目的で来日する外国人が増えるとともに、中には、日本で長期にわたって仕事をしたり、日本人と結婚して日本社会で暮らすなど、「定住化」の傾向が強まってきている。

法務省入国管理局が発表した、平成15年度末現在における外国人登録者数は191万5,030人で、前年に引き続き過去最高記録を更新している。この数は、平成14年末現在に比べ約６万3,000人の増加、10年前の平成５年末に比べると約60万人の増加となっており、外国人登録者数の日本の総人口に占める割合は1.5%である。これをさらに在留資格別に見ると、「永住者」（一般永

住者と特別永住者を総称）が全外国人登録者の38.8%を占め、残りの約６割は「非永住者」である。また「非永住者」のうち、「日本人の配偶者等」が占める割合がもっとも高く、約26万人に上り、以下、「定住者」「留学」「家族滞在」と続いている。これらの数値から、来日外国人の数は増加の一途を辿っているとともに、外国人の「定住化」が今後ますます進むことが見込まれ、従来の「国民国家」の概念を見直す時期に来たことが窺われる。このような新たな「国際化」の流れの中で「国際結婚」は大きな比重を占めており、「国際結婚」が日本社会にもたらす影響は大きいと思われる。

竹下（2000）によれば、明治６年３月に、日本で最初の国際結婚に関する規則である太政官布告が制定され、この年に初めて日本人と外国人との結婚が許可されたという。その後戦前においては、韓国併合後から第二次世界大戦後朝鮮が独立するまでの35年間は、日本国内である「内地」の日本人と朝鮮人との結婚として、いわゆる「内鮮結婚」が政策的に奨励されたことや、昭和14年の創氏改名により、日本風の名前を強要され、日本人と誤認して結婚したケース、また、日本への強制連行により日本在住の朝鮮人が増加し、日本人と朝鮮人が近接する機会が増えたことなどにより、「内鮮結婚」が増加したという。戦後は、アメリカ兵の日本上陸に伴い、アメリカ兵と結婚し、「戦争花嫁」としてアメリカに渡った日本人女性も少なくなかったと言われている。その後の国際結婚数の推移としては、1965年以降のデータによると、専ら増加傾向にあり、65年からおよそ10年間は「妻日本人、夫外国人」のケースが「夫日本人、妻外国人」を上回り、70年までは「妻日本人、夫外国人」の夫の国籍はアメリカ籍が半数前後を占めていた。ところが75年以降になると、夫の国籍は「韓国・朝鮮」が「アメリカ」を抜いて第一位となり、また、全体的に「夫日本人、妻外国人」の数が「妻日本人、夫外国人」を上回った。葛（2000）によると、1980年代から90年代後期における日本の国際結婚には、二つの大きな変化が生じているという。一つには、1975年頃に逆転した「夫日本人、妻外国人」と「妻日本人、夫外国人」の比率の差がますます広がっていること、二つには、これまでは比較的緩やかだった増加の伸びがここにきて急激になったこと、特にアジア近隣諸国から来日した外国人妻の大幅な伸びが挙げられている。

2.2 日本における国際結婚増加の背景

このような日本における国際結婚増加の社会的背景としては、都市のもつ求心力と何も持たない農村の遠心力（寺内1995）から、農村部の男性の嫁不足を招き、その救援策としてアジア人女性を求める流れがあり、これに、晩婚化の進行と結婚率の低下、女性の結婚観の変化の影響が考えられる。一方、送り出し側のアジア諸国の事情としては、葛（1999、2000）にあるように、日本との経済格差と、アジア諸国における貧困人口の増加と高い失業率による生存競争の激化、また個人主義や経済発展の不均衡による地域間格差と個人の所得格差に伴う人々の物的欲求と金銭志向への傾斜があり、これらが海外、日本への移動志向の最大のプッシュ要因であるといえる。

また、篠崎（1996）は、「夫日本人、妻外国人」の国際結婚の増加は、配偶者選択における「内婚」（自分が所属する集団の内から配偶者を選択する傾向）原理のうち、「国籍」という要素

の規制が日本人の男性において急速に緩んだからだとし、それは、とりわけ国籍に関わる「内婚」原理がもともと男女で異なっていたことが考えられるという。

篠崎によれば、国際的な移動の急増が、国内・国外における外国人との接触機会の増加を招き、「内婚」に関する社会的規範を変えつつあり、一種の移動効果を生んだといえる。しかし、内婚規範に変化をもたらしたのは、移動効果だけでなく、男性の場合、配偶者となる女性やその家族・社会に対しての「経済的優位性」「政治的優位性」のような要因があるというのである。つまり、女性の高学歴化や社会進出に伴い、女性の仕事や結婚に対する意識が変わる中にあっても、一般的に男性は女性に対して優位性を期待しておらず、その変わらぬ男性の意識が、経済力が劣るアジア人女性を求める傾向を作っている。そして、この日本人男性側の意識と相俟って、アジア人女性側の個人主義や物的欲求、上昇志向が、日本人男性とアジア人女性の国際結婚増加に結びついていると考えられる。

ボーサーとボーサーが紹介するインターマリッジに影響を与える要因の幾つかも、このような日本の社会背景を裏づけるものとなっている。その要因とは、(1)性別人口の不均衡、(2)世代間の要因、(3)エスニック・コミュニティの有無、(4)増加した社会的受容、(5)社会的距離モデル、(6)社会的・経済的階層の要因、(7)ジェンダーの要因であるが、日本の場合は特に、(1)性別人口の不均衡と、(7)ジェンダーの要因が当てはまるだろう。すなわち、日本における国際結婚増加の背景としては、日本人女性の変わる結婚観と変わらぬ社会のジェンダー意識との狭間で生じた晩婚化と、結婚率の低下が、結婚人口の性別不均衡をもたらし、それが深刻な農村部ではこれを解消するため海外に女性を求め、昇婚(経済的・社会的地位の劣る者が自分より高い者との結婚を望むこと)を望むアジア人女性との間で思惑が一致したためと考えられる。つまり、今日の日本の国際結婚増加は、出会いの場やきっかけ、動機や国籍等な多様性に富んできているとはいえ、結婚に対する変わらぬ男性の意識と、日本とアジア諸国との経済格差の上に成り立つものであるとも言えるだろう。

無論、世界規模の移民の増加や国際交流等の流れにあっては、インターマリッジが増加している要因や背景は他にもあるだろう。新田(1995)は、「接近」と「交換」の二つの理論を元に、住居的、職業的、教育的、娯楽的接近など、近似性や類似性により相互作用の機会が増えたことも国際結婚増加の一因として挙げている。しかし、この場合も経済的格差を無視することはできないとしていることからも、「夫日本人、妻外国人」の増加と、「妻日本人、夫外国人」との場合との出身国の偏りを鑑みれば、日本の国際結婚において日本人のジェンダー意識と民族観が色濃く反映されていると言えるであろう。

2.3 夫婦関係における価値観等の相互理解

国際結婚に限らず夫婦関係の満足度には様々な要素が関わっていると思われるが、夫婦関係の調和を規定する要因として、1)心理的成熟度、2)経済的条件、3)性格の一致・不一致、4)役割態度の一致・不一致、5)夫婦間のコミュニケーション、6)夫婦間の相互認知があるといわれている(廣岡1997)。そのうち性格の不一致とは、個々人が抱いている暗黙の価値観や考え方に裏打ちされていることが多く、性格の一致・不一致の要素よりは、むしろ、夫婦のそ

れぞれが育ってきた社会・文化的背景に基づく生活様式や価値観、役割態度などの方が、夫婦関係においてより直接的で重要な問題となるという指摘もある（斎藤1990）。そして、これら夫婦それぞれがもつ生活様式や価値観などは、夫婦間のコミュニケーションを通じて理解が促進され、相互認知が助長される。

親和関係を深化させていく要素としてしばしば指摘されているのが、互いの価値観や態度などの「類似性」である。斎藤（1983：84−86）は、互いの意見や態度等が一致するほどに好意を抱きやすいとし、類似性は、交換理論的にはコストが安くすみ、認知的バランス理論上からはバランス関係を生み、さらには自分の考えが支持を受け賛成されるので、自己満足度も高められるとしている。すなわち、夫婦間で価値観や生活習慣等の類似性が見出せているかはよい夫婦関係の維持において一つの重要な要素となるが、他方で相違の捉え方もまた、大きな意味を持つと言えよう。

対人関係の構築にとって、当事者間に話題や立場、趣味や性格、意見などの違いが存在することは前提条件である（佐藤1986：20−21）。ただし、西田ら（1989、1989）の異性で異文化の二者間に現れる話題に関する研究では、文化的相違に対する理解では人間関係の初期段階である知人関係において最も低く、反対に文化的相違を肯定的に評価していたのは、人間関係の後期段階である恋愛関係にある被験者で見られたと述べられている。また、対人関係においてはコミュニケーションを通じ相互調整を図りながら関係を深化させたり後退させたりするが、互いに相手と自分が相互に理解し合っているという程度が高まれば高まるほどその関係が深まるという見方もある（石井他2001：85）。

Sitaram（1976：御堂岡潔訳1984, 42−43）は、人間のコミュニケーションの全過程における重要な要素は「理解すること」とし、コミュニケーションとは受け手を「理解し、受け手に理解される行為である」と言う。夫婦間において、相違を否定的に捉えたり、問題の所在を生まれ育った文化的背景の違いや性差に安易に押し付けたりするのではなく、互いに似通っている部分を認め合い、相違を肯定的に受け止め、互いに相手を通じて自己が変化する用意ができていることが、夫婦が共によりよい関係を構築することにつながるだろう。

3．本研究調査と分析結果

3.1 研究目的と内容

本研究の目的は、夫婦が互いの価値観等を理解し合っているか、国際結婚者と日本人同士結婚者の認識を見ることで、夫婦の価値観等の理解と共生の認識の実態を把握し、国際結婚者の特徴を明らかにすることである。具体的な質問項目としては、文化的背景の異なる二者関係を見た西田ら（1989、1989）、国際結婚夫婦の会話を分析した施（1999、2000）、及び国際結婚問題を取り上げた先行研究を踏まえ、価値観等の類似と相違、自分の相手の価値観等に対する理解と理解努力、配偶者の自分の価値観等に対する理解と理解努力、口喧嘩の頻度と傷つく程度の８項目を設定した。

3.2 調査方法及び調査対象者

栃木県在住の国際結婚者とその周辺の日本人同士結婚者に、質問紙によるランダム調査を実施した。今回の調査の特徴の一つとして、特定の団体に属さず地域に散在する市民を対象としたため、知人を介しての紹介や地域の日本語ボランティア教室などを回って調査依頼をし、国際結婚者94名44組と、その周辺の日本人同士結婚者86名43組（男性87名、女性93名）計180名87組から回答を得た。調査時期は、2004年の３月から９月までである。

今回の調査対象者の特徴として、年齢について、国際結婚者は、22歳から72歳、平均年齢が40.0歳、標準偏差が9.75、日本人同士結婚者は、25歳から65歳、平均年齢が42.87歳、標準偏差が10.25であった。結婚年数について、国際結婚の場合は、0.1年から30.0年、平均年数が8.38年、標準偏差が6.87、日本人同士での結婚の場合は、0.5年から38.0年、平均年数が15.75年、標準偏差が10.54であった。子どもの数と末子の年齢については、国際結婚の場合は、子どもの数は、０人から３人、平均数が1.15人、標準偏差が0.994、末子の年齢は、０歳から23歳、平均年齢が7.97歳、標準偏差が6.533であった。日本人同士結婚の場合は、子どもの数は、０人から４人、平均数が1.70人、標準偏差が0.934、末子の年齢は、０歳から32歳、平均年齢が12.47歳、標準偏差が8.793であった。

日本以外の出身地は、中国20名、韓国４名、ブラジル・ペルーが合わせて６名、アメリカやイギリスなど欧米系が合わせて９名、そしてインドやパキスタンなど非欧米系が合わせて９名であった。日本人との国際結婚のうち、外国人が女性の場合中国や韓国など非欧米系出身者が、反対に男性の場合にはアメリカやイギリスなど欧米系出身者が多く、日本全体の国際結婚の組み合わせの特徴を反映した形となった。また、日本国籍に帰化した外国籍の人は全て女性で、中国出身者が６名、ブラジル出身者が１名であった。次に、最終学歴と職業について国際結婚か日本人同士結婚かで比べた場合、最終学歴については、大学院卒か中卒は国際結婚者に、高卒は日本人同士者の方に多かった。職業に関しては、国際結婚者では、働いていない、工員、教員、自営業が多く、日本人同士結婚では、会社員と公務員が多かった。

3.3 分析結果

3.3.1 国際結婚者、日本人同士結婚者の項目間の関連性

まず、国際結婚者、日本人同士結婚者のそれぞれにおいて、価値観の理解に関しどのような回答の傾向を持つのか把握した上で、両者を比較し、国際結婚夫婦の特徴を明らかにする。

表１、表２は、夫婦間の価値観の理解に関し、国際結婚者、日本人同士結婚者がどのような回答の特徴を持っているのか把握するため、それぞれについて項目間の相関関係を見たものである。表の中のそれぞれの数値は、項目間の関係の強さを表しており、印が多く付いているものほど、項目間の関連が強いことを意味している。

分析した結果、国際結婚者において特に項目間の相関関係が強い（P≦.001）のは、「自分の理解努力」「配偶者の理解努力」（P=.000）及び「喧嘩」「傷つく」（P=.000）であった。一方、日本人同士結婚者では、「類似」「配偶者の理解」（P=.001）、「相違」「配偶者の理解」（P=.000）、「相違」「配偶者の理解努力」（P=.001）、「相違」「喧嘩」（P=.001）、「配偶者の理解」「配偶者の理解

表１　国際結婚者の項目間の関連性

価値観や習慣が似ている								
価値観等の相違が気になる	.031*							
自分は理解している	1.000	1.000						
配偶者は理解している	.026*	.466	1.000					
自分は努力をしている	.067	1.000	.007**	1.000				
配偶者は努力をしている	.007**	.279	.018*	.081	.000***			
口喧嘩をする	.011*	.019*	.216	.121	1.000	1.000		
口喧嘩で傷つく	.031*	.05*	.516	.024*	.475	.762	.000***	
	類似	相違	理解-自	理解-配	努力-自	努力-配	口喧嘩	傷つく

***P≦.001　**P≦.01 *P≦.05

表２　日本人同士結婚者の項目間の関連性

価値観や習慣は似ている								
価値観等の相違が気になる	.002**							
自分は理解している	.059	.399						
配偶者は理解している	.001***	.000***	.010**					
自分は努力をしている	.069	.061	.052	.004**				
配偶者は努力をしている	.008**	.001***	.063	.000***	.000***			
口喧嘩をする	.011*	.001***	1.000	.289	.451	.133		
口喧嘩で傷つく	.004**	.062	.510	.075	1.000	.209	.000***	
	類似	相違	理解-自	理解-配	努力-自	努力-配	口喧嘩	傷つく

***P≦.001　**P≦.01 *P≦.05

努力」(P=.000)、「自分の理解努力」「配偶者の理解努力」(P=.000)、「喧嘩」「傷つく」(P=.000)であった。これらの結果から、日本人同士結婚者においては、夫婦間の類似性や相違には配偶者の理解や理解努力の有無が強く関係していることが見て取れる。つまり、夫婦間で類似性を見出したりあるいは夫婦間に横たわる相違を気にしない場合には、配偶者が自分の価値観等を理解していたりあるいは理解しようという努力が感じられることが必要となっている。一方国際結婚者においては、夫婦間の類似性と配偶者の理解や理解努力の間に弱い相関関係が見られたが、相違には、互いの理解や理解努力は直接関わっていないことが明らかになった。

また、国際結婚者、日本人同士結婚者それぞれにおいて、夫婦間の価値観等の理解に関する項目のうち、「傷つく」ことに影響を与える要素を見出すため、「傷つく」を目的変数としたロジスティック回帰分析を行なった。その結果、国際結婚者では２項目、日本人同士結婚者では１項目で有効な数値が得られた。それらを表３、表４にまとめた。

表３より、「傷つく」に影響を与える「相違」と「喧嘩」の非標準化係数（B）の値が、-1.494、

-1.976とともにマイナスで、また他因子の影響を補正した回帰係数指数のオッズ比（Exp（B））が.224と.139であることから、国際結婚者にとって、相違を感じなければ感じないほど、喧嘩しなければしないほど傷つかないことが分かる。同様に表４より、非標準化係数-2.067、オッズ比.127であることから、日本人同士結婚者にとって、喧嘩しなければしないほど傷つかないことが分かった。

表３

国際結婚者（N=92）

	B	標準誤差	有意確率	Exp（B）	Exp（B）の95.0% 下限	信頼区間 上限
相違	-1.494	.700	.033	.224	.057	.884
喧嘩	-1.976	.558	.000	.139	.046	.414

表４

日本人同士結婚者（N=86）

	B	標準誤差	有意確率	Exp（B）	Exp（B）の95.0% 下限	信頼区間 上限
喧嘩	-2.067	.532	.000	.127	.045	.359

3.3.2 国際結婚者、日本人同士結婚者の間で見られる相違

次に、国際結婚者、日本人同士結婚者の間において、違いが見られる項目があるかどうか調べるため、８つの項目ごとにχ二乗検定を行なった。その結果が表５である。数値にある印は、二者間の有意差の強さを表している。

表５　国際結婚者-日本人同士結婚者の項目ごとの関連性

価値観や習慣は似ている	.018*
価値観等の相違が気になる	.713
自分は理解している	1.000
配偶者は理解している	.151
自分は努力をしている	.008**
配偶者は努力をしている	.060
口喧嘩をする	.654
口喧嘩で傷つく	.016*

***P≦.001　**P≦.01 *P≦.05

表５より、二者間で有意差が認められたのは、「価値観の類似」（P=.018,df=1）、「理解努力－自分」（P=.008,df=1）、「傷つくこと」（P=.016,df=1）であった。

すなわち国際結婚者は、日本人同士で結婚している人よりも互いの価値観は似ていないと感じているものの、傷つく人は少ない。これに対し日本人同士で結婚している人は、互いの価値観等は似ていると感じているものの傷つきやすく、自分は相手の価値観等を理解する努力をし

ていないと見なしていることが示された。

以上本調査の分析結果から、全体的に国際結婚者は、日本人同士結婚者より互いの価値観等が似ていないと認めながらも、夫婦間の価値観等の違いによる摩擦で傷つくことは少ないことが明らかになった。また、日本人同士結婚者よりも自分自身が相手の価値観等を理解しようと努めている姿勢が見て取れた。

しかしその反面、相手に対し違和感を抱けば抱くほど傷つきやすいことから、互いの違いを認め合いながらもどう受け止めていくかが、国際結婚の夫婦関係において重要な要素となっていることが窺われた。

一方日本人同士の夫婦の場合は、国際結婚者より互いの価値観等は似ていると認識しており、類似性を感じれば感じるほど、傷つかないことが分かった。また、自らが相手を理解しようという努力が国際結婚者より少ない傾向も見られた。しかしながら、全般的に日本人同士結婚者は、国際結婚者より夫婦間の価値観等の摩擦で傷ついており、夫婦間の相違と喧嘩とには大きな関連性が見られた。そして、類似性や相違の認識には、配偶者の理解や理解努力を見出せるか否かが大きく関わっていることも明らかになった。

4．考　察

本研究では、国際結婚者の夫婦間の価値観等の理解と共生に関し、日本人同士結婚者との比較から分析することで、国際結婚者の特徴を浮き彫りにすることができたと思われる。まず、本稿で明らかになった国際結婚者としての特徴を検討してみたい。

日本人同士結婚者が互いの価値観等が似ていると見なし、自分は相手を理解しようとする努力をしていないと認識しているのに対し、国際結婚者は、互いの価値観や習慣等が似ていないと感じ、相手を理解しようとする努力をしていることが分かった。これは、国際結婚者は、相互作用的なコミュニケーションを通じて、それぞれが背負っている様々な文化的背景のうち、「出身国の文化」及び「異なる出身国者」としての社会的アイデンティティを、対象化させ顕在化させたためと思われる。そのため、「互いが異なる」という共通認識の下、結果として互いに理解し合う努力が見て取れた。

遠藤（1998）は、国際結婚で見られる問題に触れる中で、共同生活が成り立つための前提は相互理解・相互協力であり、どちらか一方が忍耐や譲歩を強いられている形は不自然で長続きせず、文化の違いを強調していけば際限なく対立が起こると指摘している。そのような意味で、文化的背景の異なる夫婦の間では、互いの価値観や生活習慣、食生活といった文化的背景を、自分及び相手がどのぐらい理解あるいは理解する努力をしていると認識しているかが、大切となってくる。また古畑（1973：9）は、「円滑な相互的適応」のためには自分が相手に期待していることも、相手が自分に期待していることも予測できるかが明白な条件であるとしている。そこで、夫婦が互いに相手の期待を予測できるためには、相手の価値観や習慣等が自分のものと同様ではないことを前提とする認識が必要となる。なぜなら、「当然相手も自分と同じである」という自分本位で安易な先入観は、自分の期待を相手に明確に伝えることも、また相手の自分に対する期待を汲み取ろうとする姿勢をも阻むからである。その点から考えて、日本人同

士結婚者は、文化の違いが明白な国際結婚者と比べ互いの価値観や習慣等が似ているという認識がありながらも、似ていないと感じる場合には国際結婚者より傷つきやすい傾向を孕んでいるといえるのではないだろうか。

しかし国際結婚者においても、互いの価値観等の相違の認識は傷つくことに影響を及ぼしている。つまり、相違を感じなければ感じないほど傷つかないという結果は、翻しては相違を感じれば感じるほどに傷つきやすいことも意味している。これは、違いを認識することの難しさを表わしている。すなわち、異文化間コミュニケーション研究において、互いの違いを理解し認め合うことが異文化間コミュニケーション能力の重要な要素である[1] とする一方で、互いの文化差を意識することやエスノセントリズムなどによって、コミュニケーションを行う両者の間に文化的距離が発生すると、相手の文化の価値を見誤ったり、コミュニケーションに失敗したりするという指摘（Sitaram1976：御堂岡潔訳1985, 218-220）もある。また、西田ら（1989、1989）は、「コミュニケーションは人間関係を定義するし、人間関係はコミュニケーションを定義する」として、異文化の人間関係に現れる話題を分析した研究を行っている。これによると、文化的非類似性については、後期より初期の人間関係で目立つもので、人間関係の親密度が高くなるにつれて文化的ステレオタイプは崩れコミュニケーションに及ぼす影響が少なくなるという、Altman & Taylor（1973）のソーシャル・ペネトレーション理論と一致するとした。このような先行研究は、本調査結果を裏付ける形になっており、自分と相手との類似性が感じられたり、違いが気にならない場合には、喧嘩や傷つくなどの対立には結びつかないが、反対に違いが気になる場合には喧嘩や傷つく要因となりやすいことが示された。

しかしながら、国際結婚者は、夫婦の間で価値観や習慣等が似ていないと認めた上で、自分が相手を理解する努力をしており、「共生」の理想的な形を築いているよう受け取れる。長坂・浅井（2000）の研究によれば、国際結婚夫婦の特質として見られるのは、視野の拡大と視点の転換、そして子どもを「国際人」として育てようとする姿勢であり、国家や民族を超越した意識の共有であるという。これは、互いの国家や民族的アイデンティティの違いを超えた、家族としての新たなアイデンティティを構築することで、夫婦間に横たわる相違を乗り越えていることを意味していると言えよう。

では、夫婦の価値観や習慣等を互いに理解し合い認め合う「共生」のために、何が必要なのだろうか。日本人と外国人との「共生」に向けて、国レベルや地域レベルでの支援のあり方[2] が指摘されているが、本稿では本調査結果を踏まえ、夫婦間の価値観等の理解と共生のために、夫婦の間で何が必要かを示唆してみたい。

まず一つ目としては、夫婦を一心同体の存在と見なし、類似性・同質性を過度に意識することの危険性である。確かに私たちの生活においては、「相互理解」が暗黙のうちに了解されているという前提の下に成り立っている部分が大きい。社会を形成している構成員一人一人の価値観や行動様式等が異なることは致し方ないとしても、その違いを事あるごとに自覚していけば、私たちは疲れ果ててしまうであろう。そのためどこかで「自分は相手を理解しているし、相手も自分を理解してくれている」と信じて生きている。けれども、夫婦間のコミュニケーションにおいて、意味は、相互作用の過程の中で生まれ形成されていくものであり、自分の意図

を相手に理解・実行してもらうためには、必然的に、相手の役割を理解し、相手の立場から伝えなければならない。「共生」とは相互に適応している状態であり、「相互的適応」とは、二人がそれぞれ同時的にしかも比較的持続的に相手に影響を及ぼし、また相手の影響を受ける過程である（古畑1973：３）。つまり、夫婦の間の価値観や習慣等の違いが気になる、さらには違いによって傷つくということは、自分が相手に理解してほしい、自分の習慣等を尊重してほしいというメッセージと、相手のメッセージの発信並びに応答のレベルと強さのバランスが不均衡になっていることを示していると考えられる。そのため、夫婦間の円滑なコミュニケーションや共同生活においては、自分と相手の意見や価値観、習慣等は異なり、互いに影響し合って共に関係を築き上げていくものだという認識が求められよう。

次に二つ目の示唆としては、相互作用的なコミュニケーションを行い、共同生活を営む夫婦の間において、違いを意識しすぎることの危険性である。Sitaram（1976：218-220）は、文化の違いによって意識することやエスノセントリズムなどによって、文化的距離は発生し、エスノセントリックな人は他の諸文化の価値を見誤ったり、異文化状況でのコミュニケーションに失敗したりすると述べている。また、趣味や意見、好きな食べ物や価値観等が似ていたり、態度が一致していたりすると、私たちは互いに好意を持つように、互いの類似性の度合いと好意との間に強い関係があるが、逆に捉えれば、意見が合わなかったりすると、単に考え方の不一致に終わらず、互いに感情的に険悪になることを意味する指摘（斎藤1983：84-86）もある。このように自分と相手との違いを強調することは、両者の間に理解不可能な超えがたい溝を作り、分かり合おうとする気持ちを喪失しかねない。

これらより、夫婦間の価値観や習慣等の共生においては、互いに相手を積極的に受容する姿勢こそ大切ではないかと思われる。数土（2001：15）は、私たちの人間関係は、暗黙のうちに了解されている相互理解の上に成立しているが、実はこの相互理解とは虚構であるという。そして、私たちは他者と相互理解しているはずの事柄について、その内容を明示的に確認したことがないが、それをしないのは、確認（＝説明を求める）してしまえばそれが相互理解でないことが明らかにされてしまうからであるという。私たちは、円滑な人間関係を築き、保持するのに、互いに理解し合おうとする努力と、分かり合えているという信頼、類似性・同質性の共有が必要であるが、それらを明確に問い詰めれば、私たちは真の意味で理解し合えていないことに気づかされ、うろたえてしまうだろう。夫婦といえども、全てを分かり合い、自分と同じ価値観や習慣を相手も持っていると見なすことも幻想であれば、互いの差異を顕在化させることもよりよい関係にとって危険を孕んでいる。むしろ、夫婦の共生において「理解し合う」ことが絶対不可欠の要素と考え、非現実的な理想に傷つくよりも、互いに「理解できない他者」「理解されない自分」を認め、より相手を理解できるよう相手を積極的に受け入れるとともに、自分も理解されるよう、相手に伝えていく姿勢が大切ではないだろうか。Alba&Golden（1986：202-203）は、結婚が永続的で親密なものとするならば、インターマリッジは他のいかなるタイプの関係よりも、社会的な境界線と内部者と外部者が持続的・排他的で、大きくは階層性のない関係において互いを受け入れる意志を確認する関係であると述べている。国際結婚夫婦の在り様を研究することは、今後も私たちの持つ様々な社会的・心理的境界線を乗り越え、

共生への道を示唆してくれるであろう。

本稿では、国際結婚夫婦のコミュニケーションについて、出身国とその文化の違いという視点から、価値観や習慣等の理解や共生に焦点を当てて論じた。今後の課題としては、国際結婚のもつ多層性に注目し、出身国別や日本人やそれ以外の出身者かといった観点からの分析や、出身国とその文化の差という一側面のみでなく、ジェンダーの視点からも国際結婚夫婦のコミュニケーションを論じる必要性があると思われる。また夫婦間コミュニケーションについても、価値観や習慣等の理解以外の側面について、研究することも今後の課題である。

注

[1] たとえば、山岸みどり、井下理、渡辺文夫(1992)「『異文化間能力』測定の試み」(『現代のエスプリ』299　至文堂)

[2] たとえば、石河久美子(2003)『異文化間ソーシャルワーク』川島出版では、国際結婚の外国人女性だけではないが、異文化対応のシステムの構築に向けて、多言語・多文化サービスの充実化、日本語教育プログラムの拡充、サービス機関・組織としての外国人支援、保険・医療・福祉専門者に対する研修、市民に対する異文化理解講座の開催、外国人に対する異文化理解講座の開催、支援に広がる実態調査の実施を提案している。

参考文献

石井敏・久米昭元・遠山淳編著(2001)『異文化コミュニケーションの理論-新しいパラダイムを求めて-』有斐閣ブックス85.

遠藤義孝(1998)「在日外国人ー地域に生きる外国人花嫁ー」『現代のエスプリ:エンパワーメント』376　久木田純・渡辺文夫編　至文堂

葛慧芬(1999)「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの必要性ー中国人花嫁の事例からー」『日中社会学研究』7, 日本社会学会

葛慧芬(2000)「国際結婚における『共生』の課題」金沢学院短期大学紀要「学業」VOL.42

斉藤和志(1990)『社会心理学パースペクティブ2-人と人を結ぶとき』大坊郁夫・安藤清志・池田謙一編　誠信書房

斉藤勇編(1983)『人間関係の心理学』誠信書房 84-86.

佐藤悦子(1986)『家族内コミュニケーション』勁草書房 20-21.

篠崎正美(1996)「国際結婚が家族社会学研究に与えるインパクト」『家族社会学研究』8, 日本家族社会学会編

数土直紀(2001)『理解できない他者と理解されない自己』勁草書房 15.

施利平(1999)「国際結婚夫婦のコミュニケーションにおける言語能力の役割」『年報人間科学』20, 第2分冊 大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室

施利平(2000)「国際結婚夫婦におけるコミュにケーションと婚姻満足度」『ソシオロジ』第44巻3号

寺内恵一(1995)「国際結婚への道のりと村の生活への適応ー行政の立場からー」『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所　移民研究レポート』vol. 3

竹下修子(2000)『国際結婚の社会学』学文社

長坂香織・浅井美智子(2000)「国際結婚にみられる共生の形態ー日本人と米国人のカップルの

事例を手がかりにー」『紀要ー山梨県立看護大学短期大学部』vol. 6 No. 1

西田司、S.サドウィークス、W.B.グディカンスト、S.ティン・ツーミー、吉沢豊子（1989）「日本人と米国人の対人関係におけるテーマと親密度」『国際関係研究』第9巻第3号 135-15.

西田司、S.サドウィークス、W.B.グディカンスト、S.ティン・ツーミー（1989）「異性・異文化の対人関係に現れる話題」『国際関係研究』第10巻第1号

新田文輝（1995）「最近の日本における国際結婚ー接近と交換理論を中心にした試論」『吉備国際大学社会学部研究紀要』5.

廣岡秀一（1987）「夫婦関係の調和・不調和」『家族関係の社会心理学』第2章第2節　長田雅喜編　福村出版

古畑和孝（1973）『社会心理学』岩波書店9.

Altman,I.& Taylor,D.（1973） *Public and Private Self in Japan and the United States.* Tokyo: Simal.

Andrew G.Bowser, Susan Hejazinia-Bowser *A GENERAL STUDY OF INTERMARRIAGE IN THE UNITED STATES.* College of Education University of Nevada, Reno 3-4.『海外技術資料調査集　アメリカにおけるインターマリッジの研究』（株）材料技術資料センター

K.S.Sitaram（1976）*FOUNDATIONS OF INTERCULTURAL COMMUNICATION.* 御堂岡潔訳（1984）『異文化間コミュニケーション欧米中心主義からの脱却』東京創元社 42-43.

K.S.Sitaram（1976）*Foundations of Intercultural Communication.* Charles E.Merrill Publishing Company,Columbus 御堂岡潔訳（1985）『異文化間コミュニケーション』現代社会科学叢書 218-220.

Richard.D.Alba, Reid.M.Golden 1986 *Patterns of Ethnic Marriage in the United States.* The University of North Carolina Press 202-203.『海外技術資料調査集　アメリカにおけるインターマリッジの研究』（株）材料技術資料センター